

けてきました。天正十三年（一五八五年）、ついに畠山義継（十一代城主）は伊達政宗に服属を約束しました。その時、義継は、服属のことを政宗に斡旋してくれた礼と称して、政宗の父輝宗を塩松の宮森城（岩代町・小浜）に訪問し、その帰り際、義継は輝宗をとらえました。それをききつけた政宗は、阿武隈河畔の粟の須（二本松・平石）で、父輝宗もろとも義継を銃撃し、翌天正十四年四月、二本松城を開城させることになったのです。その後、豊臣秀吉の奥羽仕置により、伊達氏、蒲生氏、上杉氏、松下氏、加藤氏と、この地方を治めた領主が変わりました。

徳川時代になり、寛永二十年（一六四三年）丹羽三代目、丹羽光重が白河城より移り住み、初代二本松藩主となり、二二六年間、丹羽氏の時代が続きました。この時、今の城の下の方の石垣や箕輪門が築かれ、武家屋敷や今の町なみが造られ、現在の二本松市の原形ができあがったのです。また丹羽氏は、農耕地や水利の確保のため二合田用水を完成させるなど、産業の振興に努めました。領地は、安達、安積一〇ヶ村、一〇万七〇〇石、ほかに田村二万石で、福島県中通りの中央部分の大部分でした。

慶応四年（一八六八年）戊辰の役で、二本松藩は、奥羽列藩同盟のため、西軍（薩摩・長州）と戦い、同年七月二十七日、総攻撃を受け、主力部隊が白河方面の戦闘に出勤している状況のなか、ほとんどが老人と少年で防戦したが力およばず、悲劇的な終末のうちに、七月二十九日、二本松霞ヶ城は落城してしまい、丹羽氏の政治に終わりを告げました。

明治四年（一八七二年）、廢藩置県により、二本松県となりましたが、すぐに福島県に統合されました。しかし、二本松の町は、安達地方の中心として繁栄してきました。

昭和三十年（一九五五年）、旧二本松町、塩沢村、岳下村、杉田村、石井村、大平村と油井村の一部が合併して、大きな二本松町となりました。さらに、昭和三十三年（一九五八年）十月には、二本松市となり、ますます安達地方の中核都市として、長い歴史と観光のまちとして、大きく発展し続けています。